



長篇小説 『兼ちやん』

東京女子高等師範學校教授

岡田美津

(一五) 手押し車

「この車を買つて下すつたお祖父ちやんにお前何ていふの。」と母親は兼ちやんに訊いた。兼ちやんは、原田の祖父が今買つてくれた手押し車を嬉しげに眼を輝らせて凝視めてゐるのたつた。

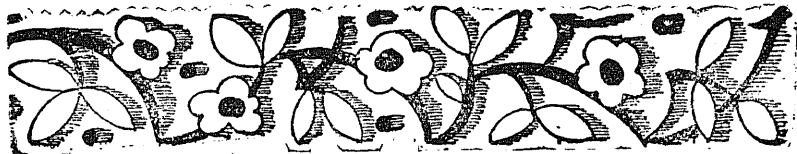
彼は、何ともいはず、いきなりお祖父さんに跳びついて抱き締めるやうにした。

「これ〜！」と老人は息をはづましカラ〜と笑つて「お祖父ちやんの呼吸が止まつてしまふワ。そんなに之が氣に入つたか良かったな。お祖母ちやんは繪本を買つたかい、ツツて言つたけれど……………」

「あたゝい繪本より車の方がよつぽどいゝや。繪本に友達を乗せられないもの。」

「それアそうだ。戶外へ行つて友達を乗せてやりたいか。」

「あゝ乗せてやりたい！」と兼ちやんは思ひ込んでいふ。



「そんなら行くがい。と子供と同じやうに嬉しがつて眺めてゐた父親が言つた。

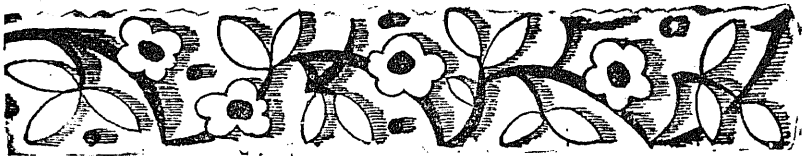
「だつてお前さん。」とお芳が口を出して「少し待たせてお置きよ。お祖父さんが岩磯から出ておいでなさるなんてめつたの土曜日でありやしない。「何だ、何だ！」と老人は孫の頭を撫で、「わしの爲に此子が家に居ることはない。坊とお祖父ちゃんとはのちにお話しような、エ、坊！」

「あたい、……居ろつていふなら家に居るよ、お祖父ちゃん。」と兼公は大事の車の方をしげくと見入つて。

「居なくツてよい。」と老人は満足の笑顔を吉藏夫婦に向けて「お祖父ちゃんはまだしばらく話してゐるからな、大丈夫ひまがある。お前車にのつて見て、どんな工合だか歸つて來てお祖父ちゃんにおきかせ。」

「ちやそうする。」と兼ちゃんと言つて、いかにも安心したらしく早速出かけていつた。

路次の入口で兼公はかね／＼庇護つてやるといふ態度で親しんでゐる勝ちちゃんといふ少女に遇つた。或時かれは小犬が勝ちちゃんにじやれつくのを追拂つてやつた事があつた。それから後、この少女は兼ちゃんを大勇士のやうに思つてかれが多少當惑する位につき纏つた。兼公がこの女の兒と一所にゐると他の友達が(仲よしの初ちゃんとは別として)見付けてからか



う、それをひどく兼公は氣にするのだつた。そんなわけで、大抵勝ちやんに聲をかけずに通りすぎるか、折角先方が兼公をもてなさうとのいぢらしい心で氣まりわるさうにしかも精をこめて話しかけるのに對していそいだぶつきら棒な摺揆するかしてゐた。

ところが今日は新しい手押し車のおかげで、兼公自身が馬鹿に上機嫌で勝ちやんに向つてにこ／＼笑つて見せたから彼女は得意やら喜悅やらで心がときめく態であつた。

「これ上げませう。」とちいさな包んだものを慎ましげに彼女は出した。

「これ何。といひながら兼ちやんは受け納めて開きかけて「チョコレートだ。これどうしたの。」と尋ねた。

「お使にいつたおだ賃にもらつたの。」

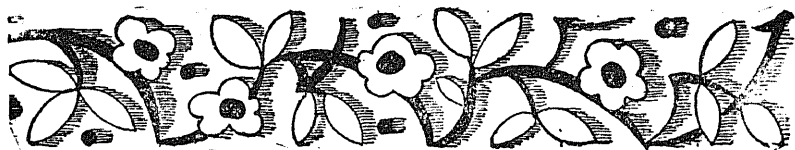
「美味いネ！ お前二つもらつたの勝ちやん。」

「いゝへ。たつた一つ。……あたしネ……チョコレートそう好きぢやないの。」

兼ちやんは食べるのを中止して「之、口へお入れよ。」と半片はんかけを返却して「どうしてみんな、あたいに呉れたの。」

「たゞ。」と勝子がいつた。

「あたいの車！」とすこし話が途切れてから彼がいつた。



「マア！」と彼女は感歎する。

「すてきな車だらう！」

「えい。」

「原田のお祖父ちゃんに貰つたんだよ。」

「そう！」

「あゝ。あたいこれへみんなを乗せてやるんだ。」

「マア！」

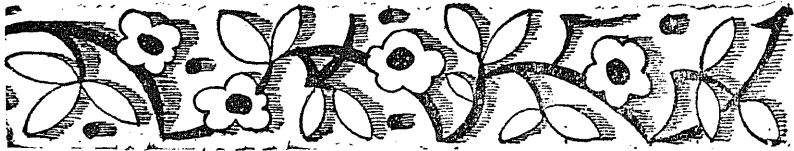
兼ちやんは暫時考へてゐたがやがて、

「勝ちやん男なら乗せてやるけれど！」

勝子の眼は曇つて、首が俛れた。彼女は得意の絶頂から屈辱の谷につき落とされたやうな氣がした。「あたし乗りたくもなんともないワ。」と言ひたかつただけれど咽喉が填つて唇が慄へて口がきけなかつた。

「勝ちやん、男だといふと思はない？」と兼ちやんは、實ほどに思ふ車の方へ身を屈めて車輪を廻はしながら尋ねた。

勝子は返事をしなかつた。兼公は身を起こして、試運轉をする前に、往來の前後を見渡し



た。勝子は後部うしろにゐてエプロンの縁ふちを眼に當てた。

兼ちやんは、路次から出て、車の取手を握りながら往來の歩道に立つた。あまり通行してゐる人もなく友達は一人も見えなかつた。

見返りもしないで兼ちやんは、だしぬけに、

「勝ちやんおいで。乗せたげよう。」と言つた。

勝子は一步出て、立ち停つた。

兼公は彼女の方をちらと見て、もう一度招待した。

勝子は眼を伏せて、やつぱり立つてゐた。

「乗りたくないの。」と彼はすこし焦心しんつたさうに尋ねた。

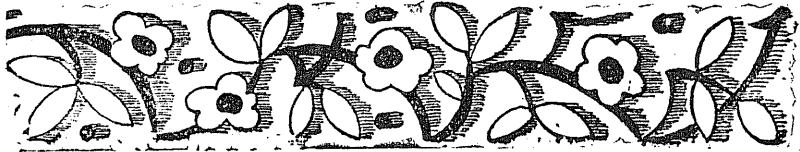
「いゝえ。」とあわてゝ言つて置いてやつぱり彼女は動かなかつた。

「何泣いてるの。」

「泣いてやしないワ。」

「泣いてるぢやないか。女だから泣いてるんだ。女は始終泣くなア。」

「始終泣いてやしないワ。」と彼女は思はず憤慨して大聲を出した。が自體おとなしい子だし崇拜してゐる兼ちやんに逆らふ氣はなかつたので、



「あたしもう泣かないワ。」と恐れ入つたやうに言つて「その車に乗せて頂戴ね、どうぞ。」と付け足した。その時のこの兒の眼の美しかつた事！しかし當人も兼ちやんもまだ年が行かなくてそんな事に氣が付かず唯二人で顔を見合せただけだつた。そして二人の間柄が以前ほど偏重でなくなつただけである。

「車の中にお坐り。」と兼ちやんが優しくいふと、

「轉倒へしちやいやよ。」と勝子は氣にするやうなまた安心してゐるやうな一瞥を兼ちやんにくれる。

「大丈夫だよ！ひつくりかへすもンか！ 脚をちぢめて上の方へやつて。」

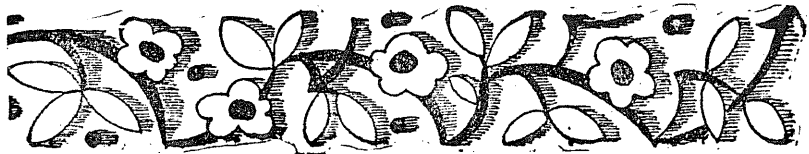
勝子は言はれた通りにして、短かい着物の裾を靴下の膝の繼ぎの上にかぶせた。

「あの隅までいつて歸つてこよう。」

「えへ。」と答へた勝ちやんは、車の兩側につかまつてすこしばかり怖さうだつた。

車は可なりの速度で走り出した。通りの隅へ來た時には、勝子は安心の笑顔をして、見知り越しの少女達が羨しさうに熟視するのを得意がつてゐた。

歸りはどうもあんまりすぐ來てしまつたので彼女はあらはに物足りなさうな様子をして車から出た。自分の崇拜してゐる人に乗せてもらふなんてこんな素晴らしい事があるか知らと思



つた。

「兼ちやんはきついね。」と彼女は感に堪へぬやうにいふと

「あゝ、あたいたい強いんだよ。」と兼公は喘ぐまいと苦心して答へた。

「面白かつたワ。」と彼女は、ちいさいな溜息をした。

兼ちやんは手に唾をして、

「もう一遍乗りたい？」と尋ねた。

「えゝ、私重くない？」

「ちつとも重くない。お入り。こんだ向ふの角まで乗せて行かう。先より遠いよ。」

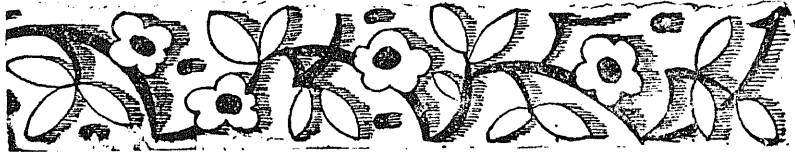
二人は再出またかけた。以前よりもつと面白かつた。よその子供等は逃げてよけるし、大人達塀や溝へ大急ぎで跳びのいた。そしてその人達が何ていつてるのだから二人には聞こえもせず二人は聞かうともしなかつた。

「どうもありがたう。」と兼ちやんは二人でもとの路次の入口に戻つて来た時にいつた。

「あ、なんでもありアしない。」と兼ちやんは暑さうな、だが嬉しさうな顔をして答へた。

「でもほんとにありがたう。よその男の兒はこんなに親切でないワ。」

「勝ちやんだツて親切だよ。そして勝ちやんはよその女の兒みたいに馬鹿でないもの。」



こんなな讃められることは滅多にないので勝子は挨拶の語も出ない程にしみぐとありがたがつた。ちよつとしてから彼女はやさしい聲で、

「私、兼ちゃん大好き……あなた私好き？」

「あゝ。」と兼ちゃんも本意を示す。

「あなた、私を大變好き？」

「あゝ。もう一遍乗せて上げやうか。」

勝子はうなづいて兼ちゃんを嬉しげに見やつた。

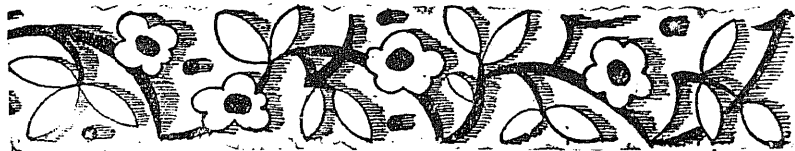
やがて彼女は車の中に坐を占め、兼ちゃんが走り出さうとすると誰だか重い手を彼の肩の上のせて、好かない聲で

「この車をお貸し。おれがこの女の兒を乗せてやる。」と言つた。

聲の主はこの邊の子供達の怖ぢ恐れてゐる大きな薄鈍うすのろの少年だつた。下品な奴で、同じ年頃の子供の仲間に決して入らず、うろつきまはつてはちいさい人達をいぢめたりどうかするとその玩具を横取りしたりした。

勝ちゃんすくんは萎縮すくで見上げながら、「この人に乗せて貰ひたくない。」と兼公に訴へた。兼公は立腹して顔が蒼白くなつてゐた。





「この子はお前に乗せてもらひたくないとさ。」と兼ちやんは取手を握つてゐるいぢめツ子に言つた。

いぢめツ子はせゝら笑つて、

「お前よりもつと速くかけてやらア。手を放せ。」

「放さない！」

「放させるせ。」

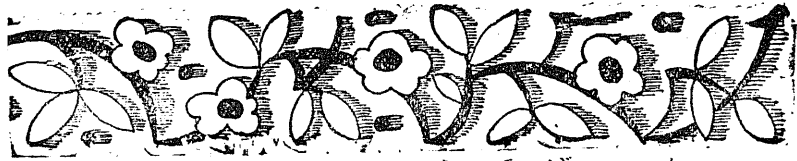
「この車貸したくないんだ。」

勝子は起ち上つた。「この人に貸しちやいけないのヨ。」といぢめツ子に「イーン」をして見せた。

「そんな口するな。さ、兼公、お前乗れ。」と態と愛想よさを見せて「一走り素的なのをやつてやらア。」

「お前になんぞ乗せてもらはないぞ。」と兼公は路次の口へ退却しながら答へた。

いぢめツ子は、何だか悪口をいつて持主の手から車をもぎ取らうとした。けれども、兼ちやんは放さじと懸命につかまつてゐたので二三分死物狂ひの争奪戦が行はれた。勝ちやんは恐れおのゝいてわが勇士を眺め、金子の初ちやんでも誰でもいゝから來てくれゝばいと願



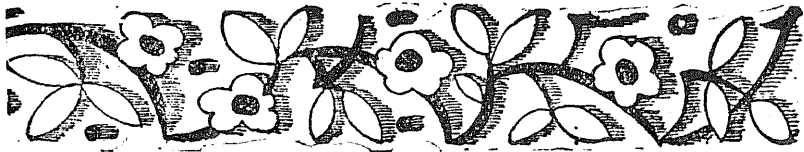
つてゐた。

「するとメリツ！といふ音がして、兼ちやんの手には車の片足が残り、いちめツ子の手にあとの全部がいつたので悪少年はアハ！と高笑ひした。

「あたいの車破したナ。」と兼ちやんは叫んで、口惜し涙をポロ／＼滴しながら破片をふりあげていちめツ子に喰つてかゝつた。いちめツ子は始のうちは馬鹿にしたやうにや／＼笑つてゐたが、しまひには本氣になつて防禦しなくてはならなくなつた。兼公は敵の指關節の上をいやといふ程擲つたので彼は思はず車を離してしまつた。けれども彼はすぐ兼ちやんを捉へて、平手でビチャ／＼打擲するのだツた。

勝子はもうこらへてゐられなくなつた。子供ながらも怒りの一聲と共にうしろからいづめツ子にのしかゝつて、手と足で多少相手の働に邪魔をさせた。それでも最後には強いものが勝ちさうであつた。ところが丁度そこへ金子の初ちやんがやつて來た。初ちやんは逞ましい子ではないが妙計を案じ出したので、勝子に離れてゐるやうに手真似で知らせ、自分はいちめツ子の右の脚を引つかんでグツと押倒した。倒れた敵の上になつた兼ちやんは、身をふりほどいて立ち上つた。がその姿のおはれさ！

いちめツ子は、おめつて起き上り初ちやん目掛けて飛び付かうとしたが初ちやんは一目散



に逃げ出して自分のうちへ歸つた。もう一足でつかまるといふきはどいところだつた。丁度初ちやんの兄が居合せていぢめツ子を思ひきり強くひつぱりたいが巡査が來たので止むを得ず途中で切り上げてしまつた。

取りのこされた兼ちやんと勝ちやんとは泣き出してしまつた。勝子が氣がついて見ると、自分の崇拜の人物は手押車を破壊され、擦り傷をつけて涙によごれた顔をして、腹立ちと痛みに嘔り泣いてゐるのだつた！ それでもかの女にはやはり之が偉大の英雄だつたのである。「泣くのおよしなさいネ……もういゝワ。」と彼女は何とかして慰めやうとの心遣ひでくりかへしくいつた。

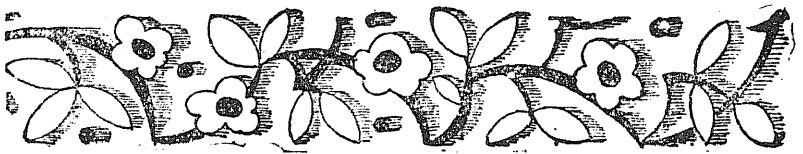
「あたいの車、破壊れちやつた！」とかれは泣いた。

「でも、繕なほるでせう。おうちへ歸らない？」

兼ちやんは首を振つて更に泣き出した……人の前、ことに女の兒の前では泣くのを嫌ひだつたけれども。

勝子はむせびながら心を落付けて

「いらつしやい。私手傳つて階段へこの車上げたげませう。そして兼ちやんのお母ちやんにいつて上げるワ、いぢめツ子があなたに掛かつて來て、あなたが打ちかへしてやつたツて」



「だつて……だつて……あたゐ打ちかへさなかつたもの。」

「だつて打ちかへすとこだつたワ……あなた怖れなかつたワ、私よく知つてよ」

勝子の語は兼ちやんの惱む精神こころに鎮痛藥だつた。併しかれば心弱い氣がして容易に涙を止めなかつた。

「私のエプロンで涙お拭きなさいネ。」としまひに勝子がいつたので、兼ちやんは屈んでその通りにした。

それから二人で破壊れた車をもつてのろり／＼と階段を登つていつた。戸が明くのを待つ間、勝子はやさしくまた勵ますやうに話をした。兼ちやんは鼻をすゝつては涙が新に出さうになるのを抑へた。

(終)